

乳幼児期における発達に合わせた投運動遊びについての検討 ～保育所保育士による実践記録を手がかりに～

Investigation of Throwing Exercise Play Matched to Development in Infancy -Based on Practical Records by Nursery School Teachers-

大森 宏一

大阪信愛学院大学 教育学部

要旨

本調査は、筆者が保育所保育士と共に体力低下に歯止めをかけるべく運動遊びの研修を重ねた報告をまとめたものである。今回は特に投運動遊びについてその発達に合わせた段階的な遊び方を保育士の援助と子どもの活動をレポートしたものから検討を加えて報告した。

投運動遊びに特化した遊びの仕掛けをした結果、特に年長児においては遊びが継続し投運動遊びを楽しんでいる様子が抽出された。さらに遊びが深く広がりを見せるためには、保育士の「子どもと一緒に」「子どもの目線で」という視点が必要であることが再確認された。

Keywords: 体力低下 運動遊び 投運動 段階的援助 環境設定

1 はじめに

子どもの体力低下に歯止めがかからない中、2020年1月から日本においてもコロナ感染が大流行し、2022年現在まで予断を許さない状況が続いている。そのような状況において、2021年のスポーツ庁の子どもの体力についての報告¹⁾によると、体力合計点は、2019年度に比べて小学生・中学生の男子・女子ともに低下したとしていた。その要因として考えられるのは、①運動時間の減少②学習以外のスクリーンタイムの増加③肥満である児童生徒の増加の3点を挙げており、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、体力低下にさらに拍車がかかったと考えられるとしている。くわえて感染症拡大防止に伴う、学校の活動制限がされたことにより、体育の授業以外での体力向上の取り組みが減少したことも考えられると報告している。

次に、小学生についての内容を見てみると「上体起こし」、「反復横とび」、「20mシャトルラン」などは特に大きく低下している。さらに「ソフトボール投げ」は、平成20年度と令和3年度を比較すると男子では25.4mから20.6m、女子では14.9mから13.3mへとこの値も大きく低下している。

一方「長座体前屈」は向上している。このことについてスポーツ庁¹⁾はその要因として、「授業や家庭で比較적取り入れやすかったり、呼吸が苦しくなにくい準備運動やストレッチ等の柔軟性を重視した活動が増えたことが一つの要因」と評価している。

小学生における体力テストの総合評価として平成27年度ごろまではゆるやかな増加傾向を示していたが、令和元年より、コロナ禍の影響もあり総合評価も低下している。このことを受け止めてスポーツ庁¹⁾は、「学校や家庭において日頃から児童生徒に、運動やスポーツをすることの大切さを伝えるとともに、運動の楽しさを実感し、工夫しながら運動をする習慣の定着に努めることが大切である。」とした。また、「コロナの影響による児童生徒の体力低下の回復を急ぐあまり、過度に運動やスポーツを実施したり、トレーニング的な取組に偏ることは避けなければならない」として運動の楽しさを実感し主体的に体を動かすような支援を推奨している。

乳幼児期は、生涯に渡って健康な生活を送るためにも、身体を動かすこと、運動自体を好きになることが大切である。小学生以上の子どもではすでに体力低下と体力の二極化が進んでおり、体力の低い子どもが運動嫌いになることが懸念される。そして乳幼児期に、上手であることや強いこと、速いことなどを期待したり強要されると運動そのものが嫌いになる可能性がある。特に乳幼児期は、教えられたり指導される環境よりも、主体的に活動する遊びを主な原動力として体を楽しく動かすことが重要である。

本報告書の取り組みは、指導ではなく環境設定をすることによる運動遊びの援助の重要性を再認識するためにも主体的な活動になるような運動遊びとしての支援を重視して研修を行った。

また、筆者がA町立保育所における保育士に向けて、運動遊びの中でも投運動に焦点をあてて遊びを広げ深めるための支援に取り組んだ。受講した保育士の実践記録からその後保育士が振り返りレポートとして記述したものを、今後の乳幼児期の運動遊びの援助の指針となるように考察をした。

2 方法(研修会の概要)

2.1 A町における保育士研修会の内容と取り組み

A町では、長時間にわたって保育所で過ごす子どもが増えたこと、保育の中で子どもの体力低下がみられること、生活環境の変化から体を動かす遊びが減少したこと、などから保育の中で積極的に運動遊びを取り入れていくことに力を入れてA町立保育所7か所すべての園において保育士の理解を深めて研修活動を行った。研修会は筆者が助言者となり「遊びの懇談会」のテーマで、保育士と筆者が一緒になって子どもの遊びについての提案をしながら、共同で学びあう形式で行った。

2.2 研修会の実施について

研修としては、令和2年度から4年度にわたり計5回の研修会を行った。実施時期の内訳は、第1回令和2年9月24日(木)、第2回令和3年5月21日(金)、第3回令和3年11月5日(金)、第4回令和3年11月9日(木)、第5回令和4年7月8日(金)であった。

参加保育士は各研修会共に20名前後であった。町内7つの保育所から年齢別に参加し、研修会後に各保育所において内容の共通理解を行った。共通理解の内容としては主に、①保育所内での環境設定を重視した支援方法、②発達に合わせた投運動の支援方法、③3つの見守り形態、④二元論的評価をしないことなどの4項目であった。

2.3 研修会の主な内容

研修会では、主に下記の6つの内容を5回にわたって実践を織り交ぜながら実施した。①体力低下の現状とその要因、②保育形態による運動能力について、③子どもの発達における運動遊びの必要性、④スポーツ文化としての投運動の段階的援助法、⑤発達段階に応じた様々な運動遊びの実践、⑥社会性の発達と集団における運動遊びの方法、の6つが主な内容である。

2.4 運動遊びの取り組み方と保育士の援助について

各保育所においては、運動遊びとして保育士に年齢別に取り組みを実施した。

A町立の保育所では、0歳児から5歳児までの部会を開いており、年齢別に運動遊びの取り組みを行い、その後部会において振り返りをして、レポートにまとめている。ここでは、「遊び」を中心とした取り組みであることから、子どもたちが自由遊びの中で興味が持てるような環境設定を心がけて援助をすることを研修会で共通理解している。また、「サイレン(手助けや援助をしながら見守る)、覆面(声をかけずにそっと見守る)、パトライト(保育士が参加し一緒に遊びながら見守る)」「(見守りの仕方を警察のパトロール形態を模してつくった筆者の独自の呼び方)として、子どもたちへの3つの見守り援助方法の確認をした。さらに二元論的評価(できる、できないを強調しすぎたほめ方や認証をしない)をできるだけ避けた援助方法も併せて確認した。

2.5 投運動への取り組みについて

今回の研修では、特に投運動を取り上げてその段階的援助方法を実践し検証をした。

前述のスポーツ庁の報告においても、投げる種目についての運動能力の低下が明らかにされている。

また、投げる動きは、体重移動や体幹のひねり動作、ボールを離すタイミングの取り方と腕のしならせ方等、その後の様々なスポーツ動作への転移が見込まれると考えられる。さらに、人間は、ほかの動物とは違い、広い可動域を持った肩甲骨の機能と拇指の対向性を持ち合わせており、遠くへ正確に投げられる機能性を持っている。この人間特有の能力を伝承することは意義があると考ええる。

くわえて、乳幼児期に、様々な動きを体験しておくことの中に投げる動きを積極的に入れることで、運動遊びのレパートリーが増え、そのほかの運動遊びがより楽しく充実したものになると思われる。

現在 A 町立の保育士は、投運動遊びについて保育士自身の経験が少ないことから子どもにも伝えにくいと考えられる。このような理由から今回投運動を積極的に取り入れることにした。

2.6 投運動の段階的援助方法について

投運動遊びの発達に合わせた援助として次のような段階を遊びとして取り上げた。

①上腕を肩から大きく振る動き：リボン運動²⁾・紙鉄砲

②投げる動きの基礎的な遊び：ロケット遊び

具体的には、A4 用紙を 2 枚使用して上部と下部を作り糊などで張り合わせてロケット状のものを作り一片を持って投げる

③物をタイミングよく離す遊び：紙飛行機、ブーメラン

具体的には、ブーメランは紙製で、1.5 cm×12 cm 程度の厚紙を 3 つ重ねてセロテープで止め戻ってくるようにチューニングをしてボールを投げる要領で斜め 45 度前方に投げる。

④体重移動と手首のスナップを効かせる遊び：X ジャイロ²⁾

具体的には、A4 用紙を複数回重ねて織り前部を重りにして筒状にし、セロテープで止めたものをボールのように投げる。

注)「X ジャイロ」はジャイロ効果を用いて身近なもので手軽に作った教材で、ラングジャパンの商品を真似て作成した。なお、筆者が表現した呼び名であるため正式名称ではない。



写真 1. ロケット教材



写真 2. ブーメラン教材



写真 3. X ジャイロ教材

物を握る、離すに加えて、腕を大きく振る、体重移動と体をひねるなどの動きは、特に子どもに教え込まずに保育士の姿をまねることを主に援助して遊びを仕掛けることを心がけることと、実際の保育現場において、子どもがやりたいと思うような環境による仕掛けを意識して、的づくりや競争して遊べる空間を設定することを共通理解した。

2.7 倫理的配慮と利益相反

本件にあたり当該の保育士及び保育士会とは、口頭及びメールにて説明をして、保育士の記述したレポートの内容を使用することについて同意を得た。

本件に関して利益相反はない。

3 結果と考察

各年齢部会における実践とレポートは、保育士が子どもへ遊びをどのように仕掛けたか、その時の子どもの様子、保育士が実践して学んだこととして記録したものを考察した。

3.1.1 5歳児記録の結果

5歳児記録について、5歳児部会報告から表1に抜粋する。

3.1.2 5歳児記録の考察

5歳児の部会においての3つの遊びではすべての項目で保育士が作り、投げて遊ぶ姿が見られた。このことにより自然と子どもが関心を持ち、遊びながら投運動遊びが身についていく様子がわかった。さらに4歳児へ教える姿が見られたとの記述から、子どもが自然と遊びの伝承をしており、横割り保育であるが自由遊びでは子どもの縦の関係がみられたことは意味があったと考えられる。保育士の仕掛けで、子どもたちが繰り返して作って遊ぶことにより、経験が増え、投げる遊びがより広がって深まっている。

表1 5歳児部会報告（抜粋）

教材	遊びの仕掛け、楽しむためにしたこと	子どもの様子
ロケット	・目標となるマットやフープ、ロープなどを高めの場所に設定する。	・保育士がロケットを投げて遊ぶと、子どもたちもロケットを持ち、投げ始めた。<u>競争すると盛り上がり繰り返して遊んでいた。</u> ・自分で作ったものは愛着があり<u>繰り返して遊ぶ姿が見られた。</u> ・以前より遠くまで飛ばせる子どもが増えた。<u>遠くまで飛ばせることで、意欲的に活動していた。</u>
Xジャイロ	・遊戯室に線を引き、とんだ距離がわかるようにした。	・自分がどこまで飛ばせたかがわかることで次の目標ができ<u>繰り返し飛ばすことで距離を伸ばしていた。</u> ・肩から重心を移動するような投げ方をし、軸足も右から左へと重心を変え、全身を使って投げる子どもが増えた。<u>またそのフォームで投げる子どもは距離が伸びていた。</u>
ブーメラン	・保育士がブーメランを作って見せる。・園庭で保育士が投げる姿をみせた。	・最初は、遠くへ飛ばそうとして勢いよく腕を動かす子どもが多かったが、自分なりに投げ方を考えながら飛ばすことで、遠くまで飛ばせたり自分のところへブーメランが戻ってきてキャッチしたりできるようになった。 ・<u>持ち方や投げ方を4歳児に教える姿が見られた。</u>
保育士が投げる遊びに取り組んで気づいたことや学んだこと		
保育士が投げる遊びを意識しながらかかわったことで、投げる時の体の使い方が変わったり（中略）いつもより運動面の成長に気づくことができた。子どもの遊びを見ながら一緒に遊びの仕掛けや言葉かけが必要であることがわかった。		

また、子どもが自然と競い合うような仕掛けをすることで、より遊びが継続している様子がわかる記述であった。くわえて、Xジャイロでは、体重移動をしながら全身を使った投げ方ができるようになった子どもがいるとの記述から、経験を重ねることで子どもの動きの成長を見られたことは、保育士にとってもやりがいにつながったのではないかと考える。

3.2.1 4歳児記録の結果

4歳児記録について、4歳児部会報告から表2に抜粋する。

表2 4歳児部会報告(抜粋)

教材	遊びの仕掛け、楽しむためにしたこと	子どもの様子
ロケット	・保育士が作ったものを1機づつ並べておき、興味が持てるようにした。 ・保育士が遠くまで飛ばす姿を見せたり、子どもと一緒に作って飛ばしたりする。 ・(略)・フラフープ(大・小)を吊るしたりして的を作る。	力いっぱい投げようとして床に叩きつける子どももいた。上手に飛ばないと遊びをやめていた。 ・<u>ロケットの形を4面から3面に持ち替えて紙飛行機のようにすることで勢いよく飛ぶこともあった。</u> また狙いを定めて飛ばすようになった。 ・<u>上手に飛ばす子どもの投げ方(左手、右手を前に出す・肩を使って腕を上にあげる・力を入れすぎない等)を真似て投げ、コツをつかむようになった。</u> <u>的に当たると喜んだり遠くに投げてみたりしていた。</u>
Xジャイロ	・すぐに作って遊べるように、部屋の入口に紙やペンを用意した。 ・持ち方がわかりやすいように、親指を載せるところにシールで印をつけ、投げる向きがわかるようにする。 ・スタート地点にビニールテープを貼り、どこまで飛んだかわるように色別のフラッグを作り立てられるようにした。	・飛んだところにフラッグを立て、友達と競い合っ て楽しむようになった。フラッグに数字が書いてあったらよいとアイディアを出し合い、<u>30分以上遊びが続いた。</u>
ブーメラン	・持ち手にしるしをつけ、持ち手がわかりやすいようにした。 ・年長児と一緒に遊び、飛ばすコツを聞いたり、保育士が投げる見本を見せたりする。 ・色々な素材で作ったものを用意する(厚紙、ダンボール、牛乳パック)。	・はじめは、床にすぐ落ちてしまい、やめてしまう子どもが多かった。 ・ブーメランが自分のところへ戻ってくることを喜んだり、遠く飛ばすことや落ちてくる様子を見て楽しんだりする子どももいた。 ・<u>ダンボールや折り紙等、違う素材で作って飛ばして遊ぶ姿が見られる。折り紙で作ったものは投げて戻ってこないが、自分たちで作ったものを喜び投げて楽しんでいた。</u>
保育士が投げる遊びに取り組んで気づいたことや学んだこと		
子どもの目に留まりやすく、いつでも遊びを始められる環境を整えることが大切であると感じた		

3.2.2 4歳児記録の考察

4歳児では、子ども自身が、ロケットの形を変えて試行錯誤して投げて遊んでいる様子が記述されていたが、このことを保育士がよく見て記述しており、自由遊びでありながら、ねらいを持って保育に取り組んでいることがわかる記述であった。子どもが他の子どもを見て、投げるポイントを真似することができている様子より、「遊び」がいかに主体的な学びにつながるかがわかる。ただし、うまく投げられない場面では遊びが継続しておらず、さらなるスモールステップの検討と興味が持てる仕掛けづくりが必要である。しかし、遊びの仕掛けと、子どもの意見に耳を傾けながらの保育により、遊びが継続していることから、子どもに寄り添いながらの保育の結果であ

ると考える。

子どもは、素材を自由に使うことにより、自分で実験を重ねており、投げてうまく飛ばなくても満足した遊びになっていくように感じた。「作る×遊ぶ」ことによる遊びの効果は大きく、子どもの大切な経験になっていると考えられる。子どもがいつでも遊べる環境づくりの大切さを感じたという記述から、そのほかの様々な遊びにおいても必要な設定であると思われるが、通常の保育業務に加えて、今回の投運動遊びを導入することは保育士の負担であったと推察できる。保育業務の負担が保育士不足の原因になるような取り組みであれば検討が必要である。

3.3.1 3歳児記録の結果

3歳児記録について、3歳児部会報告から表3に抜粋する。

3.3.2 3歳児記録の考察

3歳児のリボンの教材を使った遊びでは、リボンの棒部分を剣に見立てた遊びが流行ったようである。どちらにしても腕を大きく回すことができる遊びであれば投げる遊びにつながるが、保育士が危険を感じた点では検討が必要である。剣としての遊びとしては、とがらせない教材と当たっても刺さっても危険でない教材に検討する必要がある。

紙鉄砲では、一度鳴らすと、自分で元に戻せないこと。鳴らないものは飽きること。この2つの大きな理由からあまり遊びが長続きしていない。簡単に戻せる仕組みにする教材研究や、いくつも設置して音楽に合わせる仕掛け等、検討課題が大きい教材であると考えられる。しかし一度きりになったとしても腕を振って大きな音が鳴ることを経験することは3歳児であっても必要であると考え。この教材は、簡単で安価であるため折に触れて子どもに体験させたいものである。

Xジャイロを紙で作ったため、力の入れ具合が難しく壊れることが多かったようである。素材をペットボトルに変えたり、紙よりも変形しにくい素材の検討が必要であると考え。

投げる、というねらいとは違った遊びの展開や風の影響による思いがけない出来事のほうが楽しめたようである。素材の検討とXジャイロそのものがより楽しいものになるような仕掛けが必要である。

保育では、投げて遊ぶものを身近に置くこと、ねらいとは違う遊びであっても自由に遊んでよいことを環境設定とすることは必要であると考えられる。

3歳児では、こちらが仕掛けた遊びとは違った遊びに発展したり、遊びが継続しにくかったりしたようであるが、長時間でなくてもこのような遊びによって様々な動きを経験することが大切であると考え。

また保育士が子どもの発達に合わせて環境設定を変化させたり柔軟に教材を変えたりすることが非常に大切であるが、できる範囲で様々な取り組みをしている。日常的に様々な活動において臨機応変に対応している証ではないかと思われる。

表3 3歳児部会報告 (抜粋)

教材	遊びの仕掛け、楽しむためにしたこと	子どもの様子
リボン	・戸外に広告で作った棒に紙テープをつけたものを設定し、保育士が回してみせた。 ・キラキラテープで作ったリボンを設置した。 ・制作コーナーに広告や紙テープを設置した。 ・ごっこ遊びのアイテムとして作り遊戯室の取り出しやすい場所に設定した。 ・子どもの好きな曲を流し保育士も一緒に踊る。	・風によって変わる動きを見て子どもたちからいろんな発見があった。 ・光に当たることでキラキラしていたので花火に見立てる子どもがいた。 ・<u>自分の剣を作る子どもがいた。リボンにXジャイロをつけて回したり散歩させたりして遊んでいた。自分たちで発見した遊びは長く続いていた。</u> ・大きく回すのではなく手首を使って回す子どもがいた。 ・剣が折れると遊びがすぐに終わってしまった。 ・<u>剣で戦いごっこになって危なさを感じることもあった。</u> ・好きなキャラクターになりきって券を振り回していた。 ・剣を回しながら曲に合わせて踊っていた。
紙鉄砲	・持つ場所にするしをつけた。 ・紙の素材で鳴らしやすさが違っていた。	・印があることで持つ場所を自分で見つけていた ・紙が広がると自分で直せなかった。 ・紙の素材によって音の鳴りやすさが違った。<u>音が鳴らせないとすぐに飽きてしまった。</u>
Xジャイロ	・線やフープなどの的を作る。	・<u>力加減がむつかしくあまり飛ばなかったり、壊れやすかったりするのであまり継続しなかった。</u> ・Xジャイロに紙飛行機ロケットをはめて遊んでいた。 ・的を作ることで上に投げようとしていた ・<u>戸外では風の吹き方によって動きが変わるので遊びが継続した。</u>
保育士が投げる遊びに取り組んで気づいたことや学んだこと		
・同じ遊びでも保育士の環境設定と工夫により、遊びに変化を持たせることが継続につながった。 ・「投げる」という動きを取り入れていく中で、子どもが使いやすい素材や大きさ、重さなどを選んでいくことが大切である。 ・季節ごとの行事やごっこ遊びなどの中で、子どもが自然に「投げる」という動きを楽しんでいる姿が大切だと思った。		

3.4.1 2歳児記録の結果

2歳児記録について、2歳児部会報告から表4に抜粋する。

3.4.2 2歳児記録の考察

2歳児では、空間認知能力がまだ低いため、より広い場所で遊ぶことが安全面からも大切である。広い場所での遊びによって、子どもの動きが大きくなっていることが保育士の目に移っている。大きな筋肉を動かす動きをする遊びは、この年齢には大変重要であるので、広い場所で体をたくさん使うリボンを使った動きは有効であったと思われる。しかし、「ものを操作する動き」において、リボンは棒の部分が長くなっており危険を伴うこと、操作が難しいこと、などから2歳児では遊びの継続の難しさがある。ポンポンにするとより体を動かせたようであ

表4 2歳児部会報告(抜粋)

教材	遊びの仕掛け、楽しむためにしたこと	子どもの様子
リボン	・保育士がリボンを大きく回したり、振ったりする姿を見せる。 ・リボンの長さや太さ、素材を変えた。 ・棒の先にトンボやハート等子どもの興味のあるものをつけた。 ・園庭や、遊戯室などの広い空間で遊ぶ。 ・音楽に合わせて保育士がリボンを振る姿を見せた。 ・リボンを釣り竿に見たてて魚釣りごっこをしたり、魔法のステッキにしたりする。	・保育士の姿を見て真似ていた、保育室では空間が狭いためぶつかりそうになって危なさがあった。 ・自分の好きなものを選んでいた。 ・トンボを風になびかせたり、腕を振ったりする姿が見られた。 ・<u>広い空間ですと、ぶつかることもなく、十分にリボンを動かす姿が見られた。</u> ・<u>音楽に合わせてリボンを振り、身体の動きが大きくなった</u> ・釣り竿や魔法のステッキに見たてて遊んだが、<u>すぐに飽きてしまったり、危ない姿が見られた。</u> ・<u>リボンはあまり楽しめなかったが、ポンポンにした。</u>
保育士が投げる遊びに取り組んで気づいたことや学んだこと		
子どもの好きな遊びや興味のある遊び、子ども発信の遊びは継続につながった。 ・遊びの継続のためには、また子どもにも興味を持ってもらうためには、環境の変化や工夫、そして保育士と一緒に楽しむことが大事であると感じた。		

るため、2歳児においては、長さがあまり長くないものでの遊びが、安全面及び操作面においても良いと考える。

この年齢においては、特に子ども発信の遊びが重要で、きっかけは保育士であっても子どもが主体であることを忘れない保育が重要である。また保育士と一緒に楽しむことの重要性を記述している。保育士が2歳児と継続して遊びを一緒に楽しみたいと思うことは大切であるが、この研修会に参加した保育士はこのことを再確認しており、組織としてこのような保育士の実践を評価していくことが今後の課題でもありと考える。

3.5.1 1歳児記録の結果

1歳児記録について、1歳児部会報告から表5に抜粋する。

3.5.2 1歳児記録の考察

1歳では遊びが続かないことがあったようであるが、興味を持って動きを経験したことは意味があると考えられる。また、手を使ったり、真似たり、他のものに見立てたりすることもこの時期に重要な経験の一つである。「動きとしての遊び」と「真似遊び」、「見立て遊び」としての遊びができるものとしても有効であると考えられる。

保育士が子どもの手の大きさに合わせて新聞ボールを作ることにより遊びが楽しく広がっている。また、段ボールでキャラクターの口を作ることによって子どもがより意欲的に遊んでいる様子が見られる。

工夫して子どもに合わせた環境で遊びを展開することにより遊びが深まって継続している。全身を使った遊びと投げる遊びを保育士が積極的に取り入れることで運動の楽しさを感じられる環境設定をしている。

3.6.1 0歳児記録の結果

0歳児記録について、0歳児部会報告から表6に抜粋する。

表5 1歳児部会報告 (抜粋)

教材	遊びの仕掛け、楽しむためにしたこと	子どもの様子
リボン	・子どもの前でリボンを作った。 ・場所や素材、色を変えたり音のなるものをつけたりして変化をつけた。 ・保育士がリボンをクルクル回してみた。音楽に合わせてリボンを振った。	・保育士が作っているところを見て興味を持ち、すぐに遊び始めた。・リボンを持って回すだけではなく引きずるなど遊ぶ姿が見られたが<u>長く続かなかった</u>。・リボンをクルクル回す保育士に<u>気付いた子どもたちは近くによって行き、リボンを追いかけた</u>。歌に合わせてリボンを振っていた。 ・広告を丸めたりリボンをつけると子どもたちは持ちたがり様々な色のリボンを振って遊んでいた。特に好きな曲に合わせて回す、振る<u>手首を動かす</u>等してリボンの動きを喜んでいた。<u>蛇に見立てて散歩する</u>子どももいた。
ボール	・<u>ボールは、つかみやすい小さめ物のものや柔らかい素材のもの（お手玉）などへんかを持たせる</u>。・広々とした安全な場所で遊ぶ。・<u>ダンボールで作った箱やアンパンマンの口にボールを入れる遊びを用意する</u>。・ボールプールにビニールを取り付け、投げたボールが戻ってくるように設定する。・豆に見立てた新聞ボールを投げる。	・転がして追いかける。保育士とボールを転がしてキャッチボールを楽しむ姿が見られた。両手を使って転がす、下から上へ投げる前へ投げる様子もあった。 ・<u>腕の使い方が上手になり</u>、ボールが前に飛ぶようになってきた。ボールを落とす子どももいた。・<u>アンパンマンの口に向かってカラーボールを投げ入れようとしたり</u>、そばにいきそのままボールを入れたりしていた。・戻ってきたボールを取ろうとしてボールプールに入る子どもが増えると、投げるのではなく寝転んで遊ぶ姿に変わったいった。 ・新聞ボールは、子どもの手に収まるサイズで軽いため、まっすぐ投げることができた。子どもたちは楽しんで投げていた。
風船	・タフロープやゴムで風船を吊り下げ、引っ張ったときの感触の違いが感じられるようにする。・子どもたちが持ちやすいように、風船の大きさや形を変え様々な色のものにする。 ・風船にビニールテープを巻き跳ねるようにする。	・子どもたちは、手を伸ばして触ることを楽しんでいた。自分で風船を引っ張り手を離すと飛び上がる様子が楽しいようでくりかえし遊んでいた。・ふわりと浮かぶ風船の様子を見て、<u>投げる、受ける、打つ、捕まえる等楽しんで、以前よりも長い時間遊んでいた</u>。・風船の跳ねる様子や床についた時の音に興味を持ち繰り返し遊んでいた。
保育士が投げる遊びに取り組んで気づいたことや学んだこと		
・<u>子どもの姿を見て、好きなものや興味・関心のあるものを見逃さずに、運動遊びに取り入れることが大切である</u>。・<u>同じ遊びでも場所や素材を変えたり、仕掛けを工夫したりしながら遊びを変化させていくことで継続して遊びを楽しむことができる</u>。・保育士の姿を真似て体を動かしていた子どもの様子から、保育士は子どもたちの姿に合わせて楽しみながら言葉をかけたり、遊び方を伝えたりして遊びを盛り上げる大切さを感じた。		

表6 0歳児部会報告(抜粋)

教材	遊びの仕掛け、楽しむためにしたこと	子どもの様子
ボール	・ボールプールを設置した。 ・ボールプールに段ボールのスロープや滑り台を設置した。 ・的やゴールを設置する。	・ボールプールで泳ぐように全身を動かしたり、ボールを両手でつかんだりしていた。 ・保育士がスロープに向かって投げたボールが転がる様子を見て喜んでいて。保育士を真似てスロープに向かってボールを投げてみるがボールはスロープに届かず、あまり転がらなかった。滑り台ではボールプールに滑り込んだり、ボールを持っていき上から転がしたりしていた。 ・ボールを地面に叩きつけるように投げたり、転がしたりしていた。 ・<u>目標物を仕掛ける</u>ことで興味を持ってボールを投げようとしていた
風船	・子どもの手とどく高さにゴムで吊り下げた。 ・風船が良く跳ねるようにビニールテープを巻いた。 ・様々な大きさの色の風船を用意した。	・子どもたちは、風船をつかもうと体を伸ばし、引っ張ったり叩いたりしていた。<u>風船の動きや反応を楽しみ遊びが長く続いた。</u> ・保育士が投げ合いをしたり、風船を持ち歩いたりハイハイで追いかけてたり姿が見られた。少しさわるだけでふわっと浮くので喜んでいました。 ・バランスボールのように上に乗ってはずんだり、腹ばいで乗り体を前後に揺らしたりしていた。
マット	・マットを設置する。 ・大型積み木やマットを組み合わせ大きな山を作る。 ・月齢や活動量に合わせて保育士と一緒に少人数で遊べるようにする。	・バランスを取りながら這い上がったり滑って利して楽しんでいて。 ・高月齢児は、上る、滑る、転がるなど全身を動かしていた。低年齢児は、手足を動かして昇ったり滑ったりを経験していた。
保育士が投げる遊びに取り組んで気づいたことや学んだこと		
・保育士が子どもに見せたり、一緒に遊んだりすることが大事であると改めて思った。 ・子どもにとって「ちょっとむづかし」と感じるようなチャレンジできる環境を整え、子どもの姿に合わせて変化させていくことが大切だと感じた。 ・子どもたちは、保育士だけではなく<u>友達</u>の姿を真似ることでいろいろなことをやってみようとする姿が見られた。友達の存在やかかわりが刺激になっていることが分かった。		

3.6.2 0歳児記録の考察

0歳児では、保育士が子どもの発達から視覚への刺激も大切にしている様子がうかがえる。特に、動くものへの反応は楽しく遊びが長く続くようである。

投運動の前に全身を使った動きを大切にしながら環境設定をしている様子がうかがえる。子どもの実際の姿をよく観察すると同時に保育士が遊びを見せたり一緒に遊ぶことを意識していることがわかる。保育士や友達のかかわりを好んでいることから社会性の発達にも寄与していると考えられる。

4 おわりに

幼保連携型認定こども園教育・保育要領³⁾では「生活や遊びを通して総合的に保育すること」と明記されている。さらにその解説⁴⁾においても子どもにとっての遊びの重要性が記述されている。

今回は、保育所の子どもに対して、投運動遊びを中心に、発達に応じた援助を通して保育の方法を検証した。

ここでは、「つくる」「見立てる」「競う」「教えあう」「真似る」等子どもの遊びに欠かせない要素が多々含まれていたこと。投げる能力による評価を特に行っていないことから、この遊びの援助が総合的な保育につながったと考えられる。

また、子どもたちにとって初めての遊びも含まれており、多様な動きの獲得にも影響があったのではないかと考える。

保育士にとっても「投運動遊び」というテーマでの遊びを援助することにより、遊びのレパートリーが増えたように思われる。さらなる今後の遊びの広がりや深まりを期待したい。

子どもが、家庭や地域に帰っても、継続することができると、さらに遊びが広がり深められると考える。今後はそのような視点も盛り込みながら、援助方法と教材の工夫をしていきたい。

最後に、この研修会をともに支え考えて協力してくださった A 町立保育士会及び保育士の皆様に心から感謝したい。

引用文献

- 1) 令和3年度全国体力・運動能力、習慣等調査結果 スポーツ庁, https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukai/kodomo/zencyo/1411922_00003.html, 2022年. 9月最終閲覧日.
- 2) 倉真知子・大森宏一編者『こどもが育つ運動遊び第2版』, みらい, pp. 77-78, 2022年.
- 3) 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』, フレーベル館, p. 4, 2017年.
- 4) 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』, フレーベル館, pp. 47-49, 2015年.

参考文献

野井真吾『子どもの“からだと心”クライシス』, かもがわ出版, 2021年.

受理 2023年2月1日

公開 2023年4月1日

連絡先

大森宏一

〒536-8585 大阪市城東区古市2丁目7-30

大阪信愛学院大学 教育学部

E-mail: omorik@osaka-shinai.ac.jp